

天弁布施も見れども

12年に一度、巳年のご開帳



私は布施弁天ではありません。増尾の少林寺の弁才天よ

十一月は十二年に一度という布施弁天のご開帳だが、東海寺の内陣の開かれた厨子の中には、小さな黒っぽいものがあるようで、それが弁天様だという。しかし、数メートルほどの距離なのに、尊容はまったく分からない。弁天様は、高さ三寸ほどの荒削りの木造で、空海が彫刻し、大同二年（八〇七年）に紅竜に乗って飛来したという。すごい歴史を秘め、平安時代から連綿と伝えられてきたことになる。お守りの十六人の童子のいくつかは見る事ができた。

8本の腕で、八つの功德を施すありがたさ

お灯明をあげてお祈りし、五百円納めていただいた南無大辯財天のお札で、その尊容を想像することにした。ご覧のように八本の腕がある八臂（はっぴ）で、八つの功德があるという。①知恵が付く②財福を得る③名声を得る④病気を除く⑤邪悪を排す⑥豊かな物心を持つ⑦思いやる心を育てる⑧幸せをつかむ、という功德である。



弁天様はインド土着の神様、河川を神格化したもので、音楽、弁舌、知恵の神様だった。それが仏教に取り入れられ、八つの功德を施す弁才天（弁財天とも）となったという。八つの功德があれば、人間は万々歳である。これ以上の功德を望むのは欲張りというものである。

ならば弁天様だけお祈りしていればいい、と納得できないのがわれわれ日本人で、おとり様にも行き、初詣もする。盤石の八百万の神様に囲まれている。

布施弁天は、正しくは紅竜山東海寺という。参詣人も多くなった弁天様に布施村の東海寺が移転し、一体となった。楼門は弁天にちなんだ竜宮造りなのに、本堂は密教で内陣と外陣が区別され、内陣は暗黒の世界、その厨子に十二年に一度の顔見せをする弁天様がいます。神仏混淆の世界である。